

A-58 P-Fスタディーにみられる肥満児の特性について

香蘭女短大 水町 俊郎
○津村 敦栄

1. 肥満児の研究において、身体面からの研究は多く報告されている。しかし、心理的面における研究は少ないようである。本研究では、肥満児の性格特性をP-Fスタディー（絵画欲求不満テスト）によってみようと試みた。
2. 中間市内小・中学生93名（小学生28名，中学生65

名)の肥満児に対して P-F スタディー児童用(住田・林・一谷改訂)を実施し、いくつかの観点から分析してみた。また食事・運動・生活面における諸注意を与えることによって約8カ月後に肥満度率の推移をみた結果、比較的減少する傾向にある者と、そうでない者とに分けられた。そこで両者の比較をも行なってみた。

3. 身長別標準体重表に基づいて10%・20%・30%以上という3つの肥満度率の段階に分類した。まず、男女こみにしてみた場合、肥満度の高い30%以上の者においては外罰的傾向が強く、内罰的傾向が低かった。また社会性の発達においても遅れている傾向があった。次に、男女各々についてみた場合、男子においては、30%以上の者は同様に外罰的であり、社会性の発達の遅れがみられた。女子では、肥満度率が増すにつれて外罰的になり、内罰的傾向は低くなった。また攻撃的に否認する反応が20%台の肥満児において有意に高かった。肥満度率の推移からみて、減少傾向にある者と変化のみられない者との比較をしてみたところ、後者では社会性の発達や社会適応度は高いけれど、内罰的傾向が低く、自己疑瞞の反応がかなりみられた。